

01・仕事をクビになったので、魔女の助手に志願する

とある年の春。

五月上旬。十五時ごろ。

場所は大陸西部の中心都市。

主人公の友人である『クロエ・ルクレール』の勤務先兼実家の、魔法関係の職業斡旋所。
天気は雨。気温は十三度程度。

主人公は雨が降ると、春の訪れを感じる。

大陸北部のト田舎、毎年人が死ぬ寒さの冬が訪れる村で、雪につぶされそうになりながら育ったからだ。

ゆえに主人公は、春の雨はいい。じつとりと冷たいが、それでもこれまでよりは暖かい。
そんな不思議な感覚から、余裕をもって楽しめる気がする……。

と、考えている。

とはいっても、主人公が北部からこの都まで上京してきて早十年。
近年では、雪景色の方がよほど恋しくなりつつある。

だから、もし許されるのなら、少しだけ地元、あるいは似た気候のところへ行って。

殺されるのではないかと思うほどの冷たさの空気を肺いっぱい吸い込んで。『やっばり、やめとけばよかったわ』と多少後悔しながら、いずれ汚れゆく真つ白な世界を歩きた
い。

明日の事も将来の事も何一つ考えず、ただ氷の世界に立っていたい。
そういった感傷に浸る事もある。

だが、実際はそんな事も言っていられない。
明日の暮らしかかっているからだ。

このように現実と対峙せざるを得ない主人公は、今クロエと、机。そして、一枚の求人
票を挟んで向かい合っていた。

現在無職の主人公は、ここで彼女と、次の応募先について話し合っているのだ。

ここは職業斡旋所という場所柄に反して、ずいぶんとラフだ。人の声も行き来も多く、
せわしない雰囲気である。

だから二人もまるで、喫茶店か何かで話しているようなトーンで話していた。
喧噪の隙間から時折ばらばらと聞こえる、静かな雨の音が心地よい。

だが主人公の現状は、この天候に対し、まるで穏やかではなかった。

あとそれから、実は体調がものすごく悪かったが……ひた隠しにしていた。

SE 1 外の雨の音

【フェードインして始まる】

【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】

【部屋の外の音を、部屋の中から聞いている】

【0―5秒ほど流してSE 2】

【その後、音量が小さくなる】

【トラック終了まで流し続ける】

SE 2 職業幹旋所の環境音

【最初から最後まで流す】

【繰り返して流す】

【こちらは部屋の中の音】

【最初から小さめの音量で流す】

【0―5秒ほど流して『クロエ』のセリフ】

【その後、音量がさらにとっても小さくなる】

【トラック終了まで流し続ける】

●正面 50センチ

〈クロエ〉

「【とても心配そうに、恐る恐るたずねる。

『ほんとにこの求人に応募していいの?』という感じで念を押す。

『明るい雰囲気ではあるが、どこか気弱そうな女子学生が、様々な苦労を経てちよつと落ち着き、大人になった』という感じのトーンで。

仕事の話だが、あまりかしこまった雰囲気ではない。

クロエの職場は実家で、今話している相手も、主人公という友人なので。
仲のいい友人と、カフェで話しているようなラフな雰囲気」

……一応、最後に聞くよ。

本当に応募していいんだね?」

〈主人公〉

「ええ、そうよ。お願いね」

目の前の友人は、絵に描いたような心配の表情を浮かべ、その声は『ちよつと大げさすぎるのではないか』と思うほどの、強い不安の色をにじませている。

まるでこれから、丸腰の主人公を火竜とか、魔王とかそういった何か……とにかく、危険の権化の前に突き出すかのような面持ちである。

だが主人公は一切動じず——実際は動じていないふりをしながら——目を閉じて深くうなずいた。

この方法がいい。

というか、もはやこの選択肢しかない。

と、とうに意思を固めているからだ。

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「【とても心配そうに、恐る恐るたずねる。

『ほんとにいいの?』という感じで念を押す。

クロエは、主人公がこの求人に応募する事に反対なので

ほんとにほんとに、いいのね?」

〈主人公〉

「……クロエ。あなた、この質問、これで三十九回目よ？」

だから主人公は、思わずちよつと笑ってしまいそうになるのをこらえ、どうにか彼女をたしなめた。

親友にこうも心配される事は、本当は嫌じゃない。

むしろ、かなり嬉しい。

『偏屈・変人・仏頂面の』『付き合いづらい嫌なやつ』。

二十二年間そう言われ続けた主人公にここまでしてくれるのなんて、この世でクロエ位だからだ。

クロエは約二週間前からこのように、彼女が思うところの『やめた方がいい仕事』。

主人公にとっては『ぜひ受けたい仕事』について延々同じ説明をし、その度に『本当に受けるのか』という質問を繰り返している。

彼女自身『こんなのもう飽き飽きだろう』と理解しているだろうに。

それでも、根気よく言い聞かせてくれているのである。

その様は、正直言っていとおしい。

これがこんなにも切迫した状況でなければ。主人公はそのふかふかの髪をぼんと撫で『わかったわ。あなたの言う通りにする』と、とつくに折れていた事だろう。

だが、今回ばかりはそうはいかない。

だから、あえての無感情モード。いわば『鉄の意志を持った求職者』として、淡々と接する事になっているのだった。

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「【とても心配して、泣きそうになりながら。

必死に、かわいく食い下がる。

クロエは、たとえ主人公にどれだけ渋い顔をされようとも、反対の意思を曲げる気はないので」

だって……。

三十九回説明したくもなるよ。

どれだけ言っても『やめる』って言うてくれないんだもん」

〈主人公〉

「……………」

主人公、今にも泣きだしそうなクロエの顔を見ていられなくなって、カップを手に取り、紅茶を一口飲む。

それはクロエの家に行けば何も言わずとも出てくる、主人公が最も好む茶葉だ。

主人公の田舎ではいくらでも手に入る、ごく安価なやつである。

けれどこちらでは、少々手に入りづらいようだ。

それでもクロエの手元には、いつも必ずこれがある。

それが何を意味しているのか、主人公は理解しているつもりだ。

だから、その香りをかぐたびに、口にするたびに。主人公は自分が、いかにクロエに大切にされているかを実感する。

だからこそ、彼女の意味には沿えない。今回ばかりは言う事を聞けないのだ。

主人公は先日、とある一件から職を追われた。

離職日からはすでに一か月がたとうとしており、その間主人公は、この職業斡旋所の職員寮に『所長の娘の友人だから』というだけの理由で、無償で住まわせてもらっているのである。

それは完全に、クロエとのおご家族の厚意によるものだ。

つまり主人公は今、ルクレール家にもものすごく介護してもらいながら、命をつないでいるのである。

いくら十年の付き合いとはいえ、いくらなんでもこれはまずい。
あまりにも甘えすぎている。

クロエは『ずっといてくれていいんだよ』と言ってくれるが、そんなわけにはいくまい。一刻も早く新しい仕事を見つけて、出ていかなくてはならない。

……と、主人公は必死なのだ。

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「【どうにか食い下がろうとする。

『ほんとに、ほんとにいいの?』という感じで念を押す。

クロエは『三十九回目で最後にする』とは言っているが、四十回目以降も辞さない気持ちなので」

じゃあ、三十九回目で最後にするね?

もう一度確認するよ。

『西の魔女ミネルヴァの助手になる、住み込みの短期アルバイト』応募してオッケー?」

〈主人公〉

「ええ。ぜひ。ぜひともよろしくお願いするわ。

『明日にでも面接に行ける』って、先方に伝えていただけるかしら」

このような理由から、主人公は譲れなかった。

ゆえに主人公は紅茶を楽しんでいるふりをするべく、また瞼を閉じた状態で首肯する。クロエのその目をじっと見てしまったら、決心が鈍る。

それをわかっていいるのだ。

そう。主人公がこの仕事を選んだのは、魔女の助手という業務が、己の有する魔法薬師（まほうやくし）の資格を生かせるから、というだけではない。

この仕事が、一か月の短期アルバイトであるにもかかわらず『桁数を間違えているのではないか』と思うほどお給料がよく、おまけに住み込み、食事つきだからである。

つまり主人公は、この仕事に受かれば、これ以上ルクレール一家のお世話にならなくてもよくなる。

それどころか、住まわせてもらった期間のお礼をきっちりとし、当面の生活費を確保したうえで、実家に潤沢な仕送りまでできるだろう。

三十九回止められようと、立候補しない理由はなかったのである。

●正面 50センチ

〈クロエ〉

「【とてもしゅんとした様子で。納得していない様子で。」

一度は承認する。

クロエはしつこく食い下がってはいるが、内心『自分では主人公を止める事はできないだろう』と理解し始めているので」

うん……。

どうしても受けるんだね。

わかった。

【声のトーンを元に戻して。

つとめて明るくふるまって。

それでも、またも食い下がる。まだあきらめられないので。

話がループしだす」

でも、ほんとにいいの？

【『あの』を強調して】

相手は『あの』ミネルヴァだよ？」

〈主人公〉

「……四十回目」

だがこの友人は、主人公の決断をとことん阻みたいようだ。

全く困った人である。

だから主人公はいよいよ瞼を閉じていられなくなって、ついにクロエと目を合わせてしまふ。

今の自分は無表情どころか、半笑いになっている事だろう。

クロエは主人公より十二センチも背が高く、スタイルの良さも力の強さも、一緒に過ごした十年のうちに、主人公よりよほど高い数値を有するようになった。

なのに主人公の前では、知り合った頃とまるで変わらない。

彼女はいつまでも十年前と同じ、気弱で優しい子犬のようだ。

だから主人公は、どうしても彼女の前では黙殺とか、黙秘とか。とにかく黙ってやり過ぎず事ができないのである。

というわけでこの十年、クロエに多少無茶を言われた時は。

主人公はしばらく、それなりに抵抗はしつつ。最終的には『仕方ないわね』と言って受け入れる。

そんなやれやれ風、内心ニヤケのリアクションをするのが常で、それがむしろ快感だった。

クロエもまた、いつもそうなる事を期待していた節がある。
それなのに。

今回に限って主人公が何が何でも『はい』と言わないから、焦っているのだろう。

〈主人公〉

「ミネルヴァさんがどんな魔女かは、もうあなたから十二分に教えていただいた。その上で、わたしはこの仕事をしたいと思ってるの。おわかりいただけるかしら」

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「【主人公の言葉にかぶせる勢いで必死に。次こそ、主人公が聞いてくれるかもしれないので】
じゃあ、これで本当に最後にするから！
三十九回目の説明をさせて？」

〈主人公〉

「はいはい」

こうして主人公は『鉄の意志を持った求職者』ではいられなくなった。
単なるいつもの主人公に戻り、合計三十九回目の説明を受ける事になってしまったので

ある。

その上クロエはこのように、止めるだけ止めて、ミネルヴァの説明はしないパターンまで出てきた。

このままだと、だんだん止める時と説明する時の回数がずれていくだろう。それはさすがにカウントしづらい。

……だからもう本当に、今回でこの不毛なやり取りは終わらせるべきだ。

●正面 50センチ

〈クロエ〉

「『ミネルヴァについて述べる。』

原稿を読むアナウンサーのような感じで。

真剣に言っているが、ちよつとかわいくなってしまう感じで。

クロエはできるだけ自分の感情を交えず、仕事を斡旋する者として、中立的な意見を述べようとしている。

だが、そもそも同じ説明を三十九回繰り返す時点で、全く中立的ではない。

クロエは完全に、主人公にミネルヴァの情報を与える事で、応募を取りやめてほしいと思っている。

それはやはり、ミネルヴァが今説明しているような、怪しい事この上ない人物だからで

ある」

ミネルヴァは、ここから三十分位行った森の奥に居（きよ）を構える魔女で、アカデミ―史上最年少で魔法薬師（まほうやくし）の資格を取得した人物です。

そのたぐいまれなるセンスで、これまでに数々の新薬を開発。

今後とも活躍が期待される、業界の先駆者。最先端をゆく存在です。

「ここから、いよいよ己の感情が混じり始める。

必死な中にもちよつとかわいく、ユーモアのある感じで。

ちよつとおどろおどろしく、怪談や、ホラースポットについて語るような雰囲気になってくる。

さらにだんだんオーバーになっていく。

主人公を怖がらせたいので」

……ですが、その人柄はつかみどころがなく、謎が多く。

少々とっつきにくい女性として知られています。

正式な助手やスタッフはおらず。

使い魔は動物ではなく、どのように生み出したのかも不明なスライムやゴーレム。

「少し自信なさげに。

『植物の使い魔らしき生き物』については情報が少なく、よく知らないので」

それから……植物？ のみ。

それでも弟子入りを志願する者は後を絶たず、これまでその多くが、目覚ましい活躍を果たすようになったもの。

その全員が、なぜかごく短期間で彼女の許（もと）を離れており……。

また、弟子入り期間中の事を決して語りません。

【ダメ押しでおどろおどろしく。

ただの噂レベルの情報を使って、主人公を怖がらせようとする】

さらに噂では『人間に化ける薬』を、モンスターに分け与えているとか……。

【ぼそっと。ちよつとシユンとした感じで。

ここは一人称が『私』になる。

ちよつとかわいく、ユーモアのある感じで。

その時クロエは精一杯対応したが、正直あまり良い時間にはならなかった。

その時のミネルヴァは、話に聞くほど悪い印象ではなかった。

だが、とにかく無口で、ちつとも会話が続かなかったのだ】

ちなみに私も以前一度お会いした事がありますが、とっても無口な方でした。

【普段の口調に戻って。

ちよつとすねた中にもちよつとかわいく、ユーモアのある感じで。

クロエは何が何でも、主人公に心変わりしてほしいので】

……ね？ やめとこうよ。ね？」

〈主人公〉

「ふむ」

主人公、

……クロエったら、ついにミネルヴァさんの経歴をそらで言えるようになったのね。それにしだってこの子、人の噂話なんて嫌いなはずなのに。それでもしつこく話すって事は、それだけわたしを止めたいのね。

と、よどみなく話すクロエに、つい感心してしまう。

だが、これらの情報は、主人公を止める有効打にはならない。

とっつきにくいと言われている回数なら主人公も負ける気がしないし、そもそも『ごく短期間で彼女の許を離れる』のは、一か月後の主人公も同じであろう。

———とかその『すぐ離れた人たち』というのは。

全員、元々短期のお仕事だったのではなくて？

と思ってしまうほどだ。

となると残るはモンスターの件だが、それも噂は噂である。

主人公は『噂』というものについてよく知っている。

極論、そんなものは気にしてもしょうがない。

出元が信頼できる情報と、この身で見聞きしたもの以外は無視してよい。

ただし、見聞きした場合は少々話が変わってくるが……。

というものである、と。

主人公は自分で言うのもなんだが、ひねくれた女だ。

そのうえ、雪深き北の地方。

『人類未踏の未開の地』『なんかよくわからん怪獣が出るので人は住めない』とか。人が住みまくっている今もお言われる場所から上京してきた田舎者だ。

だからこの十年間、ある事ない事を言われまくって生きてきた。

……まあ、それには主人公側にも多少問題はある。

人付き合いは下手だし、ちよっとおかしいなと思うものを見ると、とにかく黙っていられない。

その結果、余計な事を言ったり、したりしてしまうせいで、人間関係をだめにしてしま

った事は一度や二度ではないし……。

その回数が増えるごとに、火のないところに煙を立てられる確率も上がっていった。それがまあ、まあまあ燃えて、最終的に事実のようにされてしまった事も少なくない。だから個人的には、ミネルヴァにはどちらかというと共感してしまうほうだ。

もしかすると、ミネルヴァは自分と似たタイプの人間なのではないか。

仮にそうだとしたら、そのような環境に身を置きながらもつねに優秀な実績を収めてきた彼女は、とても素晴らしい人物なのではないか。

……と、より関心と尊敬の念がわいてきた位である。

〈主人公〉

「……つまりミネルヴァさんは、とにかく風変わりな方。

人として、少々付き合いくそうな方って事よね。

だけど、そんなの気にしないわ。

とつつきにくい人間なのはお互い様ですもの」

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「【きよんととして。主人公が何を言っているのかわからないので】

へ？

『一体何を言っているのか。信じられない』という感じで。ただしあまりオーバーな反応にはならない。

思わず復唱する。

主人公が想像だにしない事を言い出したので」

とつつきにくいのはお互い様だからいい……？」

〈主人公〉

「ええ」

という事で、一般とは少し違う感性を持つ主人公は、ミネルヴァに前向きな感情を抱くようになっていた。

しかし、クロエは違うようだ。

主人公がうなずいた途端『信じられない』という顔になる。

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「かわいく、でも、少々むきになって。」

これまでとのギャップに、聞き手を少々驚かせる感じで、きっぱりと否定する。

主人公の言葉は、クロエにとっては聞き捨てならない。

はっきり主張すべきだと思うほど、承服しかねる事だったので」

お互い様じゃない。似てないよ！」

〈主人公〉

「……？」

それは少々似合わない剣幕で、今度は主人公が驚く番だった。

クロエは良くも悪くも優しすぎる女性で、誰かに強く反論する事なんてめったにない。

それどころか己を悪く言われたり、粗末に扱われたりしてもヘラヘラしてしまうので、

そのたびに主人公が代わりに反撃してきたし、それもできない時は、一緒にとても悔しい思いをしてきた。

なのに、今日に限ってはこういう事か。

主人公は正直なところ事態についていけず、また、ふいに強まった頭痛に邪魔されて、言葉を失ってしまった。

……その位調子が悪いのだ。

●正面 50センチ

〈クロエ〉

「少し間をあけてから。

ハッとしたように、まずは謝罪する。

それから申し訳なさそうに、自信なさげに訂正していく。

クロエ自身、衝動的に否定した自分に驚いているので」

あ。……ごめん。

あんまりよく知らない人なのに、決めつけるのはよくない、ね。もしかしたら……ほんとにはすごくいい人かもしれないもんね。

【少し間をあけてから。

かわいい雰囲気ではありながらも、真剣に】

……でもね。

少なくとも、あたしはあなたの事。

『変人』とか。『付き合にくそう』なんて思った事ないよ。

【特にきっぱり言って否定する。

クロエにとって、これが最も主張したい事なので】

優しいし……かっこいいもん！

【※静かではあるが、聞き手が少し驚くほど、悔しさが伝わるようにお願いします※
少し間をあけてから。

声が低くなり、悲しく、悔しそうに。

主人公が職を追われた事件の事を思い出しているので」

……ていうか、そのせいで……」

〈主人公〉

「……クロエ」

しかしここで、主人公も少しはわかってきた。

どうやら今の主人公は、クロエを情緒不安定気味にさせてしまっているようだ。

つまりクロエは、自分はいつでも言われっぱなしのくせに、主人公を悪く言う人間の事は、主人公であっても許せないらしい。

特に最近、その傾向が少々強い。

主人公が退職する羽目になった出来事について、クロエはひと月経った今も納得していない。

だからその話題に関する事になると、こうして感情を高ぶらせてしまうのだ。

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「ハッ和我に返って。

申し訳なさそうに。

主人公にたしなめられて、自分がよくない事をしたと気づいたので。

この話題については主人公から『もうこの話をするのはやめよう』とすでに言われていた。

それなのに、また繰り返してしまったので」

……あ。

ごめんね。

この話はナシだったよね。

……ごめんね！」

〈主人公〉

「いいえ。

わたしこそ、ミネルヴァさんの事何も知らないのに、想像で話してよくなかったわ。彼女に対しても、直接会った事のあるあなたに対してもね。

ごめんなさい」

だが、クロエ自身、今の自分に少々戸惑っているのだろう。

だから主人公はそんな彼女が少しでも落ち着けるよう、その細い肩を優しく撫でてやる。しかし内心では、主人公も、

……まいったわね。

と思っていた。

この話になると、クロエは長いからだ。

〈クロエ〉

「【申し訳なさそうに、でも嬉しそうにお礼を言う。

また、ちよっとほっとした様子で。

クロエは、自分が場の空気を悪くしてしまった事を申し訳なく思っているので】
ありがとう。

【明るい声で。

そそくさと話題を変える。

『この話題であればよいだろう』と判断したので。

『国研』は『国立研究所』の略】

じゃあ、とりあえずミネルヴァの事は置いといて。

お昼の速報聞いた？

国研（こくけん）の所長。

色んなところから悪行ばらされて、とうとう辞任だって！」

〈主人公〉

「……あら、そうなの」

という事で、主人公の予想は的中しそうだ。

クロエは今、話題を変えたようでも変えられていない。

というか、本当は今日ずっとこの話がしたくて、タイミングを窺っていたのだろう。だから主人公は、内心困ってしまいつつ……。

実はすでに知っている事について、知らないふりをして続きを促す事にした。

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「ちよっとテンションが上がって、興奮気味に。」

クロエは『こうなるのは当然の結果だ』と思っているので。

また、国立研究所所長について述べる」

やっぱ正義は勝つんだよ。

あの人、あのお金で何しようとしてたんだろうね。

とっくにお金持ちなのに、よくわからないよね」

〈主人公〉

「そうね」

主人公、ますます激しくなっていく頭痛と動悸をおして、ひきつった笑いを浮かべつつも、

……はあ。まったくもっておっしゃる通りだわ。

本当に何だったのかしら、あの方。

……憧れていたのに。

彼女のようになりたかったのに。今じゃ、絶対になりたくない人間の筆頭よ。

と、深く心の中で繰り返す。

そうなのである。

もはや思い出したくもない事だが……主人公が地元にいた頃から憧れていた人物であり、元職場の責任者でもある国立研究所の所長——正確には『元所長』だろうが、今は便宜上こう呼ぼう——は、今クロエの言った通り人物だった。

彼女は『魔法薬について、最高の環境で研究し学べる』というていで国立研究所を設立し、国からの支援によって偉大な研究を行っている……裏で、様々な方面から、出元の怪しいお金を集めていた。

その上——これはクロエには話していないが——気に入った新人職員、主に若い男性に性的な嫌がらせをしていたのである。

集めたお金で、一体彼女は何をしようとしていたのか。

それは、今となってはわからない事だ。

だが、少なくとも許される事をしていないのは確かだ。

そんな女性と主人公が出会い、そして主人公がその正体を知ってしまったら。

もうどうなるかは、火を見るよりも明らかだろう。

●正面 50センチ

〈クロエ〉

「ちよつとテンションが上がって、興奮気味に。」

若干無理に笑顔を作っている節はあるが、真実が明るみになり、悪者が退治された事は地変喜ばしいので。

『そのついでに、主人公がもっと感謝されて、あわよくば復職させてもらえないかな…』という願望を語る』

うん。うんうん！

こうしてあなたの告発が正しいってわかったからには、みんなお礼しに来るかもね。
『やっぱりうちに戻って来て下さい』って、お願いしに来ちゃうかも」

〈主人公〉

「ふふ。それはないと思うわよ。

あれだけの事をしてしまったんだから」

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「【ちよつと残念ではあるが、受け入れている感じで。

クロエ自身、希望的観測が過ぎるとは思っていたので」

……そっか」

しかしそんな悪者は、主人公の告発がきっかけでとうとう失脚したようだ。それ自体は因果応報だと主人公は思うが、クロエの言葉には同意しかねた。真実を知った時、主人公が取った方法は、一般的には『そこまでしなくても』と眉をひそめられるようなものだったからだ。

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「【明るい声に戻って。

以後、クロエはつとめて明るくふるまおうとする。

もう主人公を悲しませたり、困らせたりしたくないので」

あゝあ！ どうせならあたしも見たかったなあ。

あなたが所長をやつつける所。

【『確かこんな感じだったろう』という感じで。

右手を軽く前に出して、拳を主人公に向けるポーズで話しているイメージで。

しかし、控えめなクロエなので、むしろ『招き猫のポーズ』になっている」

こう……右手で一発、だっけ？」

〈主人公〉

「いいえ、二発よ。」

一発目を受けてすっ転んだところに、おまけでもう一発殴ってやったの」

●正面 50センチ

へクロエへ

「【ちよつとぽかんとして。

コミカルな印象で。

まさか二発も食らわせているとは思っていなかったし、知らなかったの。

クロエは話に夢中になるあまり、先ほどから主人公の様子がおかしい事に気づいていないので」

……二発だった」

主人公がしれつと付け加えれば、クロエが目を丸くする。

……本当は、目標そのものだった所長の悪行を目の当たりにした時、主人公はものすごくショックを受けたし、実を言えば今クロエが盛り上がっているお金の事よりも、性的嫌がらせの方がよほど許せなかった。

知って数日は『気のせいだ』『考えすぎだろう』と思おうともした。というか、寝込んだ。

今となつてはそう思った事自体が忘れたい過去だが……所長は、主人公にとって、本当に憧れの人だったのだ。イメージ通り清廉潔白、世のため人のため尽くす、素晴らしい女性であつてほしかった。

それでも現実を受け入れられた理由は、一つしかない。

このまま自分が見ないふりをしていたら、絶対に良い事にはならない。

毎日彼女の餌食になる人、不正に利用されるお金を。自分は特等席で眺めながら見殺しにするだけだと気づいたからだ。

そう思ったから主人公は己を奮い立たせて彼女に会いに行つたし、今まさに同期の男性に触っていた彼女に二発入れた。我ながら、怒りも元氣もあり余っていたのである。

それでも、別にすつきりなどはしなかった。

今でさえ、あれは勘違いだった、主人公こそが間違っていたという事になればいいのにとすら思っている。

だが、そう言つたらクロエが、彼女のご両親がどれだけ心配するかわからないから、言えない。

だから主人公は、もしこの件について尋ねられたら、まるで害虫駆除でもしたかのようなスタンスで、なんでもない顔をする事に決めていた。

幸いそれは成功し、どうにかごまかせているようである。

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「明るく楽しそうに」

あはっ♪ ますます見てみたかったなあ。

「『それなら大丈夫なのかなあ……』という感じで。

クロエは主人公の顔が少しひきつっていて、明らかに具合が悪そうな事に気を配れていない。

普段の彼女なら気づくところなのだが、今はここから、また主人公の応募をあきらめさせる方向へもっていかうと必死なので」

……まあ、国の偉い人にもパンチできちゃうあなたなら、ミネルヴァのところで大丈夫かなあ」

SE3 クロエが一枚の紙を差し出す音

「最初から最後まで流す」

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「『恐る恐る。そーっと。』

さりげなさを装って、もう一回だけ止めようとする」

でも、あたしとしては、やっぱりこっちの……。

魔法薬局のお仕事の方がお勧めなんだけども……。

【さらに、もっと別の選択肢を提示する。

これは、クロエが最もお勧めしたいが、困難を極めるものでもある。

もしこの試験に合格し、主人公が新たな資格を得た場合、今後の就職活動は一気に有利になる。

だが、これにはそもそも推薦者による推薦状と『課題薬』と呼ばれるものの提出が必要である。

今の主人公では、推薦してくれる人を探すのは難しいし、課題薬を作るまともな時間も残されていないので。

『うち』とは幹旋所の事で、つまり『幹旋所としても協力する』という意味】
後それから、今は職探しやめて。

七月の魔法薬学（まほうやくがく）試験の、受験資格とる方に集中したって、いいと思うし……。

それならうちだって、推薦してくれる人探したり。

課題薬（かだいやく）作りの手伝いもしたりして、最大限サポートするし。

……だってもし受ければ、状況全然変わってくるでしょ？」

こうして話はまた次の応募先の話に戻り、そこから、現状とても受験資格を得られそうもない『魔法薬学試験』の話にまで波及していく。

主人公はその言葉に小さく息をつくとき、差し出された新しい紙をそっと伏せ、代わりにクロエを覗き込むように見つめた。

〈主人公〉

「ク、ロ、エ」

だけどそれは、クロエに対してあきれているからではない。
本当は所長の話をするだけで、今でも気持ちが悪くなっている。

心身ともにひどく落ち込む事をどうにか隠し通せて、ホッとしたからだ。

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「【かわいくお伺いを立てる。

『やっぱりだめ?』という感じで

……だめ?」

〈主人公〉

「ごめんなさい。もう決めた事なの」

そんな主人公には、クロエの最後のお願いは効かない。

そもそもこれだけ職業斡旋所の娘が尽くしてくれてなお、次の就職先が決まらないのは。国のお偉いさん相手に暴力事件を起こしてしまったせいで、誰も主人公を雇いたがらないからだ。

主人公だってこの一か月、クロエの言葉に耳を貸さなかったわけではない。

逆に、一か月ほど彼女の言う通りにしていても、やはりうまくいかなかったから、最後の手段として、ミネルヴァのところへ志願したのだ。

いや、最後の手段というのは失礼だと主人公は思っているが……その位止められていたのである。

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「【※息遣いのみ※】で表現する。

言葉を詰まらせる。

「いよいよ、自分では主人公を止められないと理解したので」
「……っ」

〈主人公〉

「……………」

許せない事を目撃し、勢いで正義っぽい事をしたが、その後再就職に苦労する。
こうなる事を承知で行動した主人公を、周囲は正義感が強いとか、怖いもの知らずなどと評価する。

だが主人公は、それらが適切な表現ではないような気がしている。

『暴力的すぎる』とか『衝動的すぎる』という言い方であれば『そう。それ。まさにそれよ』と同意できる。だが、あまり前向きな単語の選択をしてしまうと、どうも本質からずれてしまう気がするのだ。

間違った事をしたとは思っていない。

それでも、正義というよりも『性的嫌がらせ断固撲滅派だから』『憧れていた人の腐敗ぶりを許せなかったから』という表現の方がよっぽど正確だし、それならもつとよいやり方はあったはずだとも思う。

第一主人公の行動が最良だったのなら、クロエはこんな顔をしない。

彼女の悲しみや悔しさはそのまま、主人公の至らなさが招いた結果といえるだろう。

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「残念ではあるが、受け入れている感じで。

ぼつぼつと、『。』ごとに少し間があく感じで。

クロエ自身、止める事は困難だろうとわかっていたので。

またクロエは、主人公が年の離れた弟と妹を将来大学にやるために、家への仕送りをしたい事もわかっているのだ」

そっか。

……やっぱり、どうしてもこの仕事にするんだね。

試験は……今からじゃ、ちょっと厳しいし。

お金、いるもんね。

おうちに仕送り……しなきゃだもんね」

〈主人公〉

「……………」

本当は、クロエにこんな思いをさせたくなかった。

主人公はいつでも、彼女にとって、多少人間性に癖はあるが優秀で。偉そうにとりすました、隙のない友人でいたかった。

だからせめて、今回ばかりは意地を張らせてほしい。

主人公という女性は、多少の予想外であろうとも『そんなの全然問題ない』という顔をして、平気そうに生きていく。

そんな人間である。

……と、いう事にさせてほしいからだ。

● 正面 50センチ

へクロエへ

「つとめて明るい声で。

いいいよ、自分では主人公を止められない事を認めたので。

また、これ以上食い下がったら、主人公にとって実家の経済状況とか、本当はやめたくなかったであろう国立研究所の仕事の事にまた触れずにはいられないだろうと思ったので」
わかった。

しつこくしてごめんね！

そしたら……♪」

SE 4 クロエが立ち上がる音

【最初から最後まで流す】

SE 5 クロエの足音

【最初から最後まで流す】

【だんだん遠ざかる】

【3メートルほど離れた距離感で止まる】

SE 6 クロエがミネルヴァへ連絡事項を送信する音

【最初から最後まで流す】

SE 7 クロエの足音 2

【最初から最後まで流す】

【だんだん近づいてくる】

【3メートルほど離れた位置から、50センチほどの距離感で止まる】

SE 8 クロエが椅子に腰かける音

【最初から最後まで流す】

そんな気持ちだが、クロエにも伝わったのだろう。

クロエはニコツと明るく笑うと、あっさり立ち上がって奥へ向かう。

それから、二週間もの間あれだけ渋っていたミネルヴァへの取次ぎを行い……魔法書面送信機を使って、彼女へ書類を送ってくれた。

●正面 50センチ

〈クロエ〉

「つとめて明るい声で。

これまで必死に止めていた事など、なかったかのようにふるまう。

これ以上主人公の精神的負担になりたくないの」

はーい♪

連絡したよ。

【今後の展開について予想する。

『これ』とは『ミネルヴァの求人』の事】

きつと明日位に連絡来るんじゃないかな？

まだこれ、応募者ゼロなんだ。

だからすぐ、面接に来て下さいって言われると思う！」

こうして戻ってきた彼女は、これまで自分が止めようとしていた事実などなかったかのようふるまってくれる。

その姿は、少し痛々しい。

だから主人公は、改めてその名前を呼んで、ほとんど詫びのようなお礼を言った。

〈主人公〉

「クロエ」

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「『なあに？』という感じで。

優しく続きを促す」

ん？」

〈主人公〉

「ありがとう」

その途端、クロエが優しく目を細める。

主人公が今、最も見たい表情になって、主人公を肯定してくれる。

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「明るくにつこりと」

どういたしまして♪

【明るく今後の事について述べ始める。

止められない以上は前向きに、主人公を応援したいと考えたので】

あつ。

そうだ。もし採用になったらね？ ちゃんと契約書は読むんだよ。

あなたってき。

普段はすつごく賢くて頼れるのに。

油断してる時とか、疲れてる時とかは、急にダメな人になっちゃうんだもん。

【『こんなの簡単、すぐできる』を、ちよつとドヤつと、すました感じで。

主人公の物まねをしているので。

過去の出来事を述べる。

学生時代の主人公がやらかした『実験室消滅事件』は、主人公の伝説の一つなので。

また、話題を大きく変える事で、場の空気をよくしようとしている。」

アカデミーの頃『こんなの簡単、すぐできる』とか言って、説明書読まずに作業して。実験室ふっ飛ばしちやった事あったもんね」

〈主人公〉

「……うっ」

主人公、突然の指摘に言葉を失い、思わず目を泳がせる。

予期せぬ一撃である。防ぎきれなかった。

それを言われると、主人公はまったくもってぐうの音も出ない。いよいよ『そう。それ。まさにそれよ』以外の言葉がないやつである。

確かに、主人公にはそういった傾向がある。

沈着冷静を気取りたいが本質的には感情的で、慎重でありたいが、根本的に判断能力が
あやしいのである。

特に体調が悪い時はひどい。

急に、猫か何かが状況判断したみたいになってしまう。

……そう、例の事件の時だって、ずっと悩んでいて身体が思わしくなかったわ。
——でも、もうやめましょう、この話は。

〈主人公〉

「……それを言われると、全く反論できないわね。
わかったわ。ちゃんとする。ちゃんとするから安心してちょうだい。
もう昔のわたしじゃないのよ」

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「『キャツキャと嬉しそうに。』

今日これからの過ごし方について提案する。

せめて今日は、主人公と楽しく過ごしたいと考えたので」

ふふっ。それならいいよ！

そしたらさ、そうならないためにも。

今夜はおいしいもの食べて、パワーつけようね。

最近変な病気も流行ってるしさ、栄養しっかり取らないと。

すごい作ってあげるからね。

……後（あと）、最近眠れないって言ってたでしょ？

「ちよつとドヤつと、かわいく。

だが、実際は無理をしている。

本当は、隙あらばまだ止めたいので」

今夜はあたしが一緒に寝て、子守歌歌ってあげる」

〈主人公〉

「……あら。

それはありがたいわね。何を歌ってくださるの？」

●正面 50センチ

〈クロエ〉

「【嬉しそうに。

主人公がのってくれた事が嬉しいので】

えへへ。楽しみにしてて♪」

こうしていつもの空気に戻った……ように見える二人は、テーブルをはさんで微笑み合う。

それはささやかながらも、あまりにも幸せだ。
だから主人公は、

いつもこの感じがいい。クロエとは、一生こうでいたいわ。
と思う。

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「嬉しそうに。

もっと楽しい事を提案しようとして途切れる。

ミネルヴァからの返信が来た事に気づいたので」

後（あと）……」

SE9 ミネルヴァから返信が届く音

「最初から最後まで流す」

「3メートルほど離れた位置から聞こえる」

だが、それは叶わなかった。
ふいに奥からベルが鳴って、会話が途切れたからだ。

SE10 クロエが立ち上がる音

【最初から最後まで流す】

SE11 クロエの足音3

【最初から最後まで流す】

【だんだん遠ざかる】

【3メートルほど離れた距離感で止まる】

それとともにクロエは立ち上がり、音がしたと思われる場所まで向かって、拾い上げた
白い紙を見つめる。

何やら複雑な面持ちだ。

だから主人公が何事かと見守っていると、すらりとしなやかな背中が、言いにくそうに
振り向いた。

▲ ボイス加工あり

【3メートルほど離れた位置から聞こえる】

●正面 50センチ

〈クロエ〉

「「ちよつと言いくそくに。

明るくふるまっているが、本当は言いたくない。

早速ミネルヴァから返事があったので」

あー……」

〈主人公〉

「どうしたの？」

SE 12 クロエの足音4

【最初から最後まで流す】

【だんだん近づいてくる】

【0—1秒ほど流して、次の『クロエ』のセリフと重ねて流す】

【3メートルほど離れた位置から、50センチほどの距離感で止まる】

クロエは紙を持ったままこちらへ戻ると、立ち上がったまま口を開く。

▲ ボイス加工あり

【だんだん近づいてくる】

【3メートルほど離れた位置から、50センチほどの距離感で止まる】

● 正面 50センチ 上 50センチ

〈クロエ〉

「明るくふるまっているが、ちょっと暗いトーンで。

正直なところ、主人公との間に水を差された気分なので」

早速返事が来たみたい」

〈主人公〉

「なんとおっしゃってるの？」

もしかすると『すでに他の人に決まった』という通知でも来たのだろうか。

主人公は思わずびくっとするが、どうやらそうではないようだ。

紙を手渡された途端『お待ちしています』の文言が主人公の目に入ったからだ。

SE13 クロエが主人公に紙を手渡す音

【最初から最後まで流す】

SE14 クロエが椅子に座る音

【最初から最後まで流す】

●正面 50センチ

〈クロエ〉

「ちよつと言いくそうに。

明るくふるまっているが、本当は言いたくない。

言えば、話題はまた仕事の事に戻ってしまうので」

……その。他の希望者はいないから、いつでも好きな時に来ていいって」

——なるほど。であれば、とるべき行動は一つね。

主人公はその言葉を聞くなり、心の中でホッと胸を撫でおろし、早速立ち上がる。それから、体調不良なんて一切ないようなふりをして、クロエにこう告げた。

SE15 主人公が立ち上がる音

【最初から最後まで流す】

〈主人公〉

「……そうなの。」

よし。じゃあ、今すぐ行ってくるわね」

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「【驚いて。

これは確かに主人公の性格上、言い出しそうな事ではある。

だが今は体調が思わしくないはずだし、天候もよくない。

その上今から行ったら、面接ができるのは夕方になってしまう。

それでは、帰宅も遅くなってしまうので」

ええっ？」

だが、この発言は、想像以上にクロエを驚かせてしまったらしい。

それでも、主人公としては妥当な判断のつもりだ。

今から行けばなんとか日が暮れる前に到着できるし、そこまで遅くならずに帰れるだろ

う。

そうすれば、結果がどうあれ、すっきりとした気分でクロエたちとの食事を楽しめるはずだ。

そう考えたのだ。

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「困ってしまいがち、おろおろと。」

無理に今行かない方がよい理由を述べる」

雨降ってるよ……？ それにもうお昼過ぎだし。

なんか、具合も、よくなさそうだし……」

〈主人公〉

「大丈夫よ。わたし、雨が好きですもの」

『好きですもの』とは少々不自然な気がしたが、多少オーバーな表現を用いたとしても、今は前向きな感じを出したかった。

それに主人公は、もう、できるだけ早くこの場を離れたくなっていた。

このままここにいたら、主人公はクロエに本音を打ち明けてしまいそうだ。
それはたとえば――……。

……いや、だめだ。頭に浮かべる事もだめだ。それらは。

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「『じゃあ、せめて送っていくよ』と言おうとして途切れる。

主人公にたしなめられたので」

じゃあ、せめて送……」

〈主人公〉

「あなたは仕事中でしょ？」

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「言葉を詰まらせる。

いよいよ、自分では主人公を止められないと理解したので」

……う」

クロエの瞳がしゅんと揺れ、そのふわふわの髪の毛も、心なしかしぼんだように見える。

〈主人公〉

「大丈夫。わたしの経験上、返事の早いやつはいいやつよ。

『本当に今すぐ行きます』って伝えておいてくれる？」

その弱々しい肩に、主人公は優しく声をかける。

はたから見れば主人公とクロエの関係は、このように、主人公の方が気弱なクロエを支え、鼓舞しているように見えるのかもしれない。

だが、真に依存しているのは自分の方だと、主人公はわかっている。

いや、先ほどのように『誰の目から見てもあなたの方が甘えまくっているように見えま
すよ』とつつこみが入りそうではあるが……とにかくどうあれ、主人公は自立したいのだ。
とにかく今日をその一歩として、踏み出していきたいのだ。

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「内心渋々、でも明るい声で。

主人公の負担にならないよう、つとめて明るくふるまっているの………わかったよ。これからすぐ行きますって返事しとく。

「ちよっと明るくコミカルに、お祈りする感じで。

ミネルヴァの人格に対して希望を述べる」

ああ。ミネルヴァが噂と違う、すくすくいい人で話しやすくて。

あなたの将来に繋がる仕事を教えてくれる、素敵な人でありますように！」

〈主人公〉

「そうよ。どうかそうでありますように！

………では、行ってくるわね」

● 正面 50センチ

〈クロエ〉

「優しく、真剣に」

………気を付けてね。

待ってるからね。

「どうしても言わずにはいられずに、一気に言う。

クロエはどうしても、主人公にあきらめて欲しくないのです」
後、試験の申請は五月二十八日。二時位まで受け付けてるから。
諦めないで……やっぱりもう少しだけ考えてみて！」

〈主人公〉

「ええ。……ありがとう」

●正面 50センチ

〈クロエ〉

「【明るく。

心中は複雑だが、これ以上主人公の精神的負担になりたくないのです】
じゃあ……いつてらっしゃい！」

こうして主人公は、クロエに向かって胸の高さで手を振ると、机から離れ、荷物を持って歩き出す。

こちらが背を向けて、歩き出してなお。仕事しながら、己の背中を見つめている親友の視線に気づきながら。

今日だけは、振り向かず歩いていく。

そして、

大丈夫、大丈夫……。

ミネルヴァさんはきっと良い方。そう。きっとそう、絶対にそう。

クロエに頼るのはこれで終わり。絶対終わり。

自分で招いた結果なのだから、自分で落とし前をつけないと。

と、頭の中で繰り返し唱えながら、外へ出ていく。

その姿は、主人公としては、いつもと変わらず毅然と、すたすたとしたもののつもりだった……。

クロエはそれを、ずっと心配そうに見送っていた。

SE 16 主人公の足音

【最初から最後まで流す】

SE 17 職業幹旋所の扉を開く音

【最初から最後まで流す】

SE18 職業斡旋所の扉が閉まる音
【最初から最後まで流す】

ここでフェードアウトして終了。

